

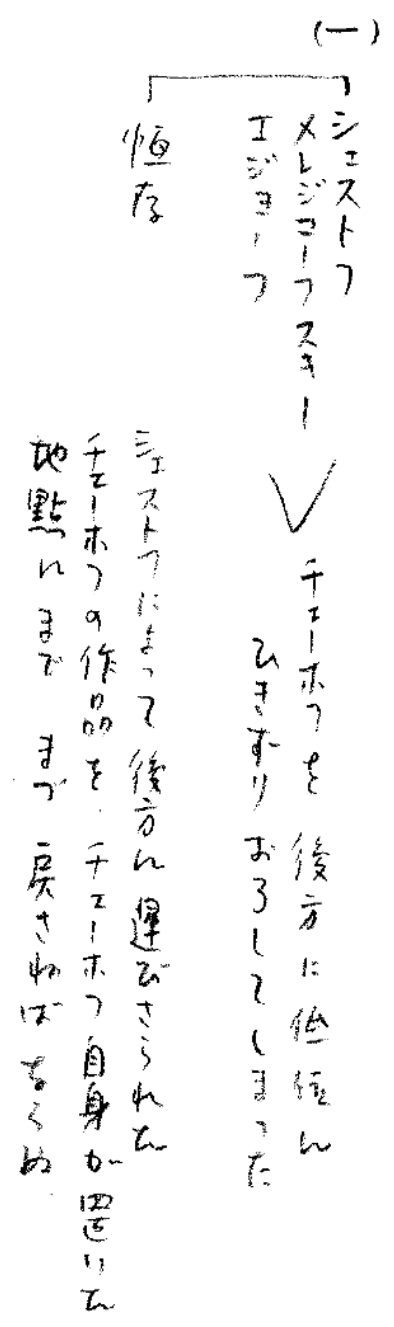
「チエーホフ」 讀書メモ

昭和二十三年十一月 批評 第六十二號（初出）
「チエーホフの孤獨」

昭和二十四年八月 創元社 「西歐作家論」所収
昭和二十六年十月 創元文庫 「西歐作家論」
昭和四十二年一月 講談社 「西歐作家論」

恒存か 自分は日本でチエーホフになりたいと言ったといふか、それはどのような場合の発言なのだろうか。年譜をたどってみても、チエーホフにつけて、まとまって論じたと推される文意は、見当たらない。右のチエーホフ論以外に、著者たるものがあるのだろうか。白水鍾花が好きだった様か、それも論じてゐる。冗談の様に、惚れた女のことばを書かすといふ佐伯氏との対話で、言つてゐるか、チエーホフも、そうだったのか。

文意の要点



シエストフのチエーホフ論を批判

チエーホフは、空虚思想をなほさく、それに対して果敢に闘争をこころめてゐるのにはあつたか。

「チエーホフ」の批判もあつてはゐる

「チエーホフ」は、マルクス主義者の批判にもちこたへるだけの地點に到達してゐるのか。

エニョーフのチエーホフ論

(実証主義)

(印象主義)

客観主義・科学的態度

リアリズム

インプリシヨニズム

インプリシヨニスト・チエーホフ論はあたつてゐるか
その真の意味するところとは何か

チエーホフは 十九世紀の認識過剰を非難

「この世のことはなんにもわかんない」

外光派チエーホフは、大自然との直接の交流を愛してゐた
対象を正確にとらへることをむはるく、対象を言葉に
味はふことが目的である。

← 生の快楽を邪魔されたのにならう、その防衛本能か
敵の所在をかみつけた

← 本来のいかに自身に属するものと、さうではなぬものとを
発見した

スラヴ魂と、ヨーロッパの情物とも識別しん

← 敵を攻撃するものはせず、自ら傷つくやなか
傷みのために泣くものによつて、ほろかざりあるもの
したくなるかゝた

← ここにはもはや倫理はない
ただチエーホフの性格の力を見るばかりだ

(二) チエーホフが敵としてみたものの正體とは

← 自己完成 良心 クリスト教道徳、その北月後にいそむ
選民意識と自我意識

一八八〇年、比帝政ロシアのイニテリゲンツィアの生能を見てとり、その北伐後にある西政の近代精神の害毒を看破しえなかつた。

←

千エーホフは近代の心理主義の底にゐる、暗い我意の破壊力か
呪はしかつた。かれの言ひだかつた たったひとつのこと
他人の七罪を信ぜよ

(三)

千エーホフの作品に見られる

冷厳なる客觀主義と甘美なる感傷主義との結合

リアリズムとセンシメンタリズム、科學と藝術の一致を
求めていた。千エーホフのユートピア

千エーホフの性格

人に強制力を行使せぬゆゑ

彼の作品には慰めのみあり、おどろかす人間像と
人々は見のかしからず

千エーホフの戯曲の清潔感ある澄明さ、悲しみの
通じてゐる極度の明るさ、

←

これこそが千エーホフの才だ

人間性の純粋を保持し之を少数の善人のひとり

西政との対決に加へて

トルストイ、ドストエフスキとも対決

←

社会では、端役を演じてゐる 個々の少数の
人間が、めいめいの努力により、獲得する一種の
「無執著」の精神、といふものを得た。

この「無執著」の性格とは、

チエーホフの解決したものの

ドストエフスキやトルストイにおける西欧との解決の
しかたそのものの解決 ↓ スウガの民族性とも解決したといへる
チエーホフは スウガの魂にとらはれることかゝるもの

←
チエーホフの新しいこゝろあり 弱點もここにあり

無執着

不定的 ↓ イガアーフに見られた ロシア民族性 ぶよぶ

當時のインテリゲンツィアの生き方

← 美しい理想主義 (ロシア人の興奮性)

疲労感 退屈感 怠惰

チエーホフの到達した無執着とは

・ すべての地上的欲望を虚に肯定するとなれば
欲望そのものの生理的必然として、その充足感と
奴隸的不自由感のため、疲労と倦みにかやつてくる
←
きびしい自己把握の緊張を持続させねば構うかの
困難な境にあるのだ

人間とその生活に対する 世界は無垢の多量性

←

論理の世界を放下してほめる 無執着の態度を
保証しうる

←

トルストイの道徳 人間的な才能・技能

才能は勇氣 善 (自我からの解放)
自由 生命

チエーホフは、ヨーロッパの知性を身につけかつ
それら毒されず、それを利用することにより
スウガ人を超えて 人間への純粹な愛に到達した

← 原因非 あるいは ほからしいこと

← 孤独な教養人の微笑さうかべるかゝる
たぐいごとく たへしのふし